中国学におけるテキストの諸問題（シンポジウム開催代表挨拶）

2013.10.14 於秋田大学

静永　健（九州大学）

◆一、趣旨説明

私たち「中国学」の研究者は、哲学・歴史学・文学・語学という学問分野、そして時代区分やジャンルを問わず、均しくその研究対象とするテキスト（文献資料・作品）を基本的に中国から得ています。特に 1990 年代以降に本格的な研究を開始した私たち若い世代の多くは、例えば北京の中華書局版や上海古籍出版社版など中国で翻刻整理・排印出版されたテキストを、その初期の段階（大学院生時代）での基本資料とし、続いては宋元版など稀覯本の影印（これも多くが中国・台湾で撮影・出版されたもの）を扱い、更に今世紀に入ってはインターネット上に公開された各種の電子テキストなどをも利用しつつ、現在の研究活動を展開しています。つまり、私たちの研究上必須のものが、これらの「テキスト」であり、しかもその大半以上がまことに至極当然のことながら、中国で編輯・発信されたものに依拠しています。

しかしここには言うまでもなく、個々の媒体の特性による避けて通れない陥穽（落とし穴）があります。この落とし穴は、それぞれのテキストを専門に扱う研究者間ではすでに自明の事柄とされながらも、時代やジャンルが少し離れただけで、意外にも気づかれない多くの問題があるように思われます。今回の「日本中国学会次世代シンポジウム」では、標題の通り「テキストの諸問題」と題し、それぞれの専門分野から、個々にはすでに明らかとなっているテキストの注意点を報告し合い、その情報を幾分なりとも共有し合うことを目的として開催致しました。

◆二、忘れられた、日本

まずは静永が平素取り組んでいる唐代の詩文に関するものから例を挙げましょう。

唐詩の場合、殆どの研究者が等しく依拠する基本テキストとして『全唐詩』そして『全唐文』があります。これは清朝に入って編輯されたものです。しかし唐代の詩文の中には、白楽天の『白氏文集』をはじめ、古く平安時代より我が国に伝えられた極めて古いテキストがあり、その中には後世の中国には誤って伝えられてしまったもの、および今はもう伝承が絶えている貴重な本文があります。

例えば大江維時（888～963）編纂と伝えられる『千載佳句』は、初盛唐から晩唐五代に至る詩人の七言詩句 1083 聯が収録されていますが、その中に、盛唐の詩人王維の詩句とされる次のような一聯が残っています。

自恨開遅還落早　　自ら恨む 開くこと遅くして還た落つること早きを
縱横只是怨春風　　縱横 只だ是れ春風を怨む

（下巻・草木部・牡丹 649・王維「牡丹花」）

この詩句は『全唐詩』未収録の佚文で、江戸時代、市河寛斎（1749～1820）が『全唐詩逸』（文化元年 1800 刊）に紹介し、同書によって清代中国にも伝えられたものです。しかし現在の王維詩集の校本が全て乾隆元年（1736）序刊の趙殿成『王右丞集箋注』に基づくために、この逸文の存在に気づかず、全く忘れ去られています。この詩句が紛れもなく王維の作品であることは、『千載佳句』全体の収録作品の傾向などから、客観的にも証明されるのですが、このように日本に残る大切な佚文が放置されたままになっているのが、現在の唐詩テキストの実情です。

◆三、コピー版の悲劇

ただ嬉しいことに、最近はこれら日本の古い写本資料群（旧鈔本）の重要度も急速に認知されて来ています。例えば上海古籍出版社より 2000 年と 2011 年（増補版）の二度にわたって影印出版された『唐鈔文選集注彙存』は、日本国内の我々も容易に見ることが難しく、しかも各地に分蔵されている貴重資料を、1 セットの書籍で通覧できるものであり、その利用価値にはまことに高いものがあります。今後もこれらの影印出版を熱望します。

だが、この上海古籍版『文選集注』の図版の不鮮明さは、実に残念です。例えば巻六十三、屈原の「離騒経」の冒頭部分をご覧下さい（第 1 冊、797・798 頁）。この図版は、画像解析度の低いコピー印刷を重ねているために、破損部分の文字が見え難く、また紙の地色の汚れや折れ線などが黒く映り込んでしまっていて、結果、判読が大変困難な図版となっています。

これを昭和十一年（1936）京都の写真家小林忠治郎（1869～1951）が撮影した原版で見てみましょう。紙の破損部分も白く鮮明に映し出されており、この当時の最高水準の技術によって丁寧に撮影されていることが判ります。古典文学の分野において、日本は、その貴重資料の所蔵の点に関しては必ずしも「外国」ではありません。しかし、その公開に当たっては、有識者による監修の下、精巧な図版の提供が必要不可欠です。

◆四、見えない朱筆

私は、日本の貴重資料が高く評価されていない理由の一つとして、このような図版公開時の意識のあり方に問題があると思っています。今日、技術的には昭和初期の頃に比べると格段に進歩し、デジタル画像によるカラー図版の公開も、もはや殆ど問題が無いだろうと思うのですが、実際にはまだ十分な成果が出ておりません。中には、数十年前に撮影されたモノクロ写真を取り出し、それを何の点検作業も加えずにホームページ上に立ち上げたり、影印資料として出版されているものも見受けられます。

ここに例示するのは『白氏文集』の旧鈔本のうち、田中穣（ゆたか）氏が最後まで所蔵し続けた五巻の図版です。現在『貴重典籍叢書』（2001 年刊）の一つとして出版されている影印は、いまだモノクロの、些か鮮明とは言えない図版です。そこで私が独自に原本の熟覧調査をしたところ、写真では映っていない多くの朱筆があることに気づきました。この書き入れは、中世の日本に存在していた中国伝来の古写本（唐鈔本）などからの校勘であって、中には中国の現存諸刊本では既に消滅してしまった貴重な文字異同もあります。

本日図版に挙げますのは、『白氏文集』巻八の「郡斎暇日、辱常州陳郎中使君早春暁坐水西館書事詩十六韻、見寄亦以十六韻酬之」という詩の第九句「遥思毗陵館」の部分です。原本ではその両脇に「以後想像之心」という六文字の注記が見えます。この朱筆書き入れは現存する『白氏文集』の他の刊本、そして筆写本のいずれにも見えない唯一のものです。この注記が果たして白楽天本人のものかどうかは今後の課題ですが、今ここで私が提言したいのは、我が国に残るさまざまな漢籍（写本・刊本）を、もっと鮮明で精巧なカラー画像で、かつもっと積極的に影印出版して欲しいということです。くだんの『白氏文集』旧鈔本には、他にも本文の文字を胡粉と思しき白い絵の具で塗り潰し、全く異なる字を上書きした部分もあります（これは残念ながらカラー図版でも元来の字を判読するのは難しい）。我が国に残る貴重な文献資料なのですから、せめて鎌倉・南北朝期以前のものについては、日本が誇る重要遺産として、和文・漢文の別なく、精緻な図版が公開される努力が望まれます。

◆五、日本文化の遺産として

実は「漢籍」という熟語は日本語（和製漢語）であります。このことは昨年、とあるシンポジウムで日本にお招きした浙江工商大学の王勇先生から直接教示を受け、はたと気がついたことです。日本の書籍を分類する際、和文の書籍や仏典・聖教類と区別するために、それ以外の中国伝来の書物および漢文で書かれた日本人の著作等をこのように称したのです。

しかし、……であるならば尚更に、日本に残る中世以前の中国書籍は貴重です。私は、『文選』『白氏文集』そして司馬遷の『史記』などは、日本に残る旧鈔本等を底本の中心に据え、日本独自の校本を作ることが可能だと考えています。またこれによって、特に刊本（印刷本）以前の書籍のありさまが大きく解明されるだろうと信じています。

そして、この成果はただ単に中国学の分野だけに留まらず、日本の歴史や文化の研究にも大いに役立つものであることを、他の分野の研究者や一般の方々にも広く知ってもらいたいと思っています。

最後に挙げる図版は、昭和 30 年代に一度写真撮影が許された『九条本文選』と称される貴重資料です。この旧鈔本は現在も皇室の御文庫内に眠っています。本日はその第一巻末尾の奥書をご覧に入れますが、この文選の古写本は「先年の甘縄の回禄」で灰燼に帰し、再び原本を求めて写し直されたもので、その後、最終的には「正慶二年二月十四日に書写、翌朝朱墨の両点を（校）勘したもの」と書かれています。この「甘縄の回禄（火災）」とは、恐らく鎌倉後期の大事件霜月騒動を指していると考えられます。当時、鎌倉幕府最大の有力御家人安達泰盛（1231～1285）が北条氏によって騙し討ちに遭い、弘安八年（1285）十一月十七日、その邸宅がある鎌倉の甘縄の地で族滅された争乱のことです。そして、この九条本そのものが筆写された正慶二年とは、西暦 1333 年、すなわち新田義貞の挙兵によって鎌倉幕府が滅亡した年に当たります。新田軍が稲村ヶ崎を突破したのが旧暦 5 月 21 日。だとすればこの『九条本文選』はその約四ヶ月前（二月に閏月あり）に書き写されたことになります。このように日本に残る中国典籍は、中国学のみならず国語学国文学や日本史の研究者とも共同し、もっと積極的な公開と分析が行われるべきだと思っています。〈終〉